The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エッセイ ： 共に比べる ： 岩手県野田村～トロント市の往復5年間をもとに
Author(s)	モハーチ, ゲルゲイ
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 121-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72118
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

共に比べる

岩手県野田村〜トロント市の往復 5 年間をもとに

モハーチ ゲルゲイ
大阪大学大学院人間科学研究科准教授
未来共生プログラム元特任助教

大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムでは、毎年1年目の夏に実施される東北コミュニティ・ラーニングと、2年目の春に行われるRESPECTトロント大学サマースクールという二つの国内外の中期フィールド実習がカリキュラムに組み込まれている。私はプログラムが始まってから2013 〜 2018年の間、毎年それぞれ参加し、8月中旬を岩手県の野田村、5月の前半をトロントで過ごしてきた。こうして、野田村とトロントを行き来し、フィールド実習の企画や実施に関わったことが本稿のきっかけとも言える。履修生とともに共生について学び、ともに共生と多文化主義を比較し、ともに未来を創ろうとする中で、その「未来」が――予測どおりだが――「現在」になった。ここでは、この二つの実習での経験から具現化された比較の旅を、3つのスナップショット記録を通じて振り返ってみる。

さまざまな壁
――2015年8月3日（月）・大阪大学岩手県野田村サテライト

今日から3回目を迎えた東北コミュニティ・ラーニングの実習が始まる。学生6人、学生のお子さん1人、教員3人、合計10人。1週間にわたって合宿生活をし、早朝の畑仕事から夜中の祭り会場の片付けまで、多様な活動に関わりながら、復興の現場への参与観察を通じて支援の意義と協働的実践の可能性を探っていく日々となるだろ

う。

今年は、私だけ別ルートで来ることにした。筑波大学での集中講義が終わってから、二日間かけて福島と三陸を通って東北の海岸を上がってきた。原発事故と津波の痕跡を自分の目で見たかったこともあった。そして南三陸、気仙沼、野田村の三箇所で実施されている本授業の文脈を「復興」として読み替えたかったのである。それぞれの被害とそれぞれの復興があるが、復興工事の大型トラックが国道45号線を続々と走り回り、情報や人が海岸沿いを行き来し、被災者は各市町村でお互いの状況を比べたりすることで復興の現場と現場がつながることもある（木村 2016）。

南三陸町では防潮堤建設の進捗、気仙沼市では荒海ホタテの事業について必死に尋ねられた。「野田は復興がかなり進んでますよね～」とあらゆる場面で言われた。そして興味深いことに、この話は防潮堤の建設を軸に、「我々」と野田村との比較で語られる。野田村では、従来10メートル（一部12メートル）であった防潮堤は津波で部分的に破壊された。その後14メートルで整備し直し、さらに第1～3堤防が加えられることがすでに決まった。工事もだいぶ進んでいる。誰もが見逃すはずはない膨大な工事であり、そのおかげで海の

写真1. 野田村・東北コミュニティ・ラーニング2日目
建設中の防潮堤、2015年8月（出典：著者撮影）

景色は見えなくなりつつある。それはそれとして、防潮堤の高さや位置さえ決まらず、廃虚となった街並みを毎日歩いている人々にとって、野田村の防潮堤は、やはり復興の象徴に見えるようである。人々は相互に防潮堤を意識し、自らの生活と比べるからである。海岸沿いの二日間の道のりを通して、今までほとんど意識していなかった、防潮堤の比較が切り開く絆が見えてきた。**相互に人工物を比較することで、人と人の共生が立ち上がることもあるのだろうか。**

学生たちが新幹線とバスで移動し、午後に野田村に着いた。そのまま3台の車で小さな村の海岸沿いと山地域を廻って、建設中の防潮堤も見てきたが、学生たちは、あまり興味を持たなかったような気がする。彼らの生活において、おそらく比べようがないものである。ただのコンクリートの塊。

サテライトに戻ってから、明日以降の予定などを学生と教員で簡単に打ち合わせる。時間が限られている中、学生たちが事前に紹介された方々を訪ね、復興を共に生きることについて聞き取り、津波災害から四年後の野田村の現状を見据えようとする毎日になる。三陸鉄道や保育所など、村民の生活実践に根ざした独自の試みを丁寧に追い、共生について学ぶ毎日。「共生」とは、事前に定義された理念ではない。出会った人々との協働から学ぶ絆であるかもしれない。さまざまな立ち位置を結びつけ、報告書やラジオ番組のような、ある程度一体性をもつ成果物を短期間で創出することと同時に、いやその前に、個々の村民との触れ合いを大切にし、復興過程の多様性を摑むことを狙いとする。異なる視点だからこそ、共通の課題が浮かび上がるのか。そしてその課題がいかに村民と私たちをつなぐのか。なかなか一筋縄ではない。

夕方から城内地区の十府ヶ浦食堂で開いた歓迎会を機に、初日の緊張が少しずつほぐれはじめてきた。長年お世話になっている久慈広域観光協議会の貫牛さんが「やませ」という夏に海からやってくる北東の風について学生たちに語っている。明日は三陸鉄道からきっと見ることができるだろう、と私はぼんやり思う。珍しく津波の話

は一切出ない。

二年前の夏、初めてここ野田村を教員二人で訪れたとき、同じプレハブの食堂で昼食をとりながら、はじめて被災者から直接に津波の話を聞いたことは今でも鮮明に覚えている。それ以来十数回も来ているせいか、この野田村は「災害」や「復興」のような言葉で語れない場所になってきた。関西からやってきた学生たちにとって、この村はいったいどのように映っているのだろうか。「被災地」というイメージをこの一週間で少しでも変えることができるのか。それもこのフィールドワーク合宿の狙いの一つなのである。

「ここはどこ…？」と、夜の暗い帰り道の途中、岐路に立っている学生が隣の貫牛さんに聞く。「なにも見えへん」と戸惑った顔で言う。「ちょうどいい」と私は思う。壁を超えるには、聞くだけではなく、壁、あるいは防潮堤、あるいは岐路の向こうにある三つの道を比べることが欠かせないからである。

ホームカミング
――2017年5月1日（月）・トロント大学、Asian Institute、Transit House

2017年のRESPECTトロント大学サマースクールが始まってから5日目。時差ボケもそろそろ抜けてきて、履修生たちがトロントの時間と季節の違い、そしてなにより英語の環境に馴染んできているところ。昨日、二つの移民中心の教会での礼拝に参加してきた。北ヨーク（North York）でガーナ系の移民たちと踊り、スカーボロー（Scarborough）でカリブ系のキリスト教信仰者たちが作るハラル料理（！）を試食したり、カナダ式の多文化主義を身をもって体験してきた。今日は一日中大学で授業。昨日の経験を活かし、カナダにおける多文化主義の現状をさらに掘り下げていく。授業担当者は、パキスタン系のシンガポール育ち、ロンドンで学位を取った人類学者であるギリッシュ・ダスワニ（Girish Daswani）氏である。

この「Home-making amongst the Diaspora」（ディアスポラによる居場所づくり）という授業は、毎年「あなたにとって『home』はどこにあるのか？」という質問から始まる。それほど難しい課題ではないし、答えも例年どおり「家族」、「実家」、「家」、「自分の部屋」など。しかし、ギリッシュの今日の次の質問は予想外だった。「では、『home』は日本語でなんていうの？」と彼が履修生たちに聞く。日本語が話せない彼にとって、この質問はいったいなんの意図があるんだろうなと気になっている。学生たちの答えを聞きながら、半分無意識に、ハンガリー語へと訳そうとしている。頭の中でハンガリー語（「otthon」、「itthon」）と外から耳に入る日本語（「自宅」、「家庭」、「故郷」、「里」、「母国」…ちょっと待って、「母国」か！？…「haza」？）が混じり合う。同時通訳のような騒音。

新鮮な空気を吸いに教室のすぐ隣にあるカフェに行く。トロントで一番美味しいコーヒー。肌寒い風が吹くにも関わらず、大勢の人々がテラス（ここでは「パティオ」（patio）と言うが）に座って朝食後の一杯を楽しんでいる。私にとって日本での、あるいはハンガリーでの「ホーム」ともまったく違う空間であるものの、トロントに来る時はここが一番心地よいスポットであることに最近気付いた。このように落ち着くことができる場所さえあれば、わざわざ「ホーム」を作らなくても良いのでは、と考える人もいるかもしれない。しかし、コーヒーがなくなると、店を出なければならない。おそらく「ホーム」の本来の意味とは異なるという現実である。ギリッシュのコーヒーを買って、教室に戻ることにする。

ちょうど休憩なので、ギリッシュに今日の課題について尋ねてみる。なぜ学生たちに英語の「home」の日本語の訳語を考えさせたのか。「うん、確かにこれは今年から新しく取り入れた課題」とギリッシュが言う。二年前のサマースクールの最終発表会、履修生たちはギリッシュの問いを考え続けた。そして、英語の「home」と日本語の「住む」という単語を比べたことを、私は思い出した。履修生の発問にギリッシュは触発され、授業を工夫するようになったという。ギリッシュが説明を続ける。

なるほど！と思いました。僕はこの「home」のネタを授業でよく使う主な理由は、「home」は誰もが心が通じる感覚であるからです。いわゆるアイスブレイカーでしょう。しかし、あの発表を聞いたとき、誰もが「home」を経験しているもの、そうでなかったとしても、「home」をもちたいという夢は当然抱くだろうというという僕の前提は、一瞬のうちに崩れてしまった。

結論から言うと、2年前の発表では、英語の名詞と日本語の動詞という二つの概念の比較をふまえ、履修生たちが震災後の居場所づくりなど、実践的なやりくりの中で現れる共生関係について考察した。そこで「共生」と「多文化主義」を比べ直す新しい可能性をギリッシュが感じたそうである。名詞と動詞、実践と政策、**そもそも比較不可能な二つのものを比較するときに、比べられた二つのものの関係性が徐々に築かれていくのだ。**

午後の最後のセッションで、ギリッシュがホワイトボードに「Multiculturalism」と「Kyosei」を大きな字で並べて書いて、参加者全員がそれぞれに自由にキーワードを板書するよう指示する。事前に読んできた数多くの論文、カナダの多文化主義の歴史と批判を解説した授業、そしてトロントに暮らしている先住民や移民たちとの出会いのせいか、「多文化主義」の欄がどんどん埋まる――「ethnicity」、「culture」、「visible」、「understanding」など。一方で、「共生」の欄はなかなか埋まらない。夏の東北でのフィールドワークをはじめ、秋のプラクティカル・ワークの中で、さまざまな現場で共生の実践に取り組んだ履修生たちだが、どうやらその経験を言語化するのは難しいようだ。「さあ、多文化主義との類似点と相違点を考えてみたらどう？」とギリッシュが励ましている。おそらく暗黙の理念として存在している「共生」は、今、ここ、自分の目の前、つまりホワイトボード上の「多文化主義」との比較を得て、無作為なキーワードによって徐々に概念としての性格を持ち出していく――「non-humans」、「listening」、「not visible」、「no policy」など。共通点はなかなか出てこないが。

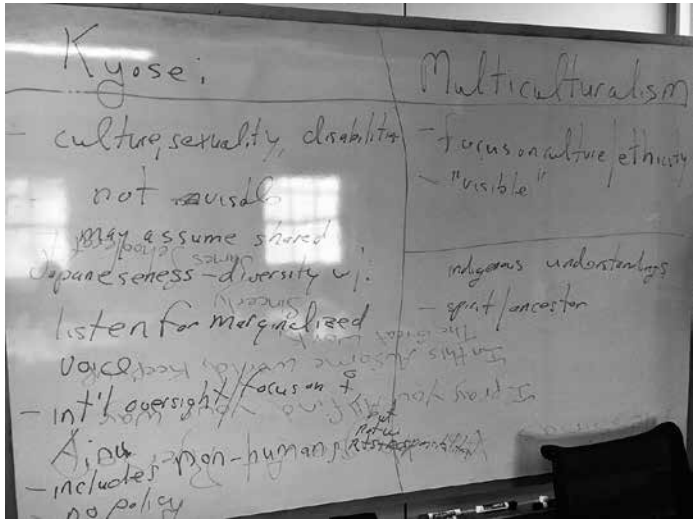

写真2. トロント大学、Transit House・RESPECTトロント海外研修　5日目
ホワイトボード、2017年5月（出典：著者撮影）

遭遇としての共生学
――2018年12月4日（火）、大阪大学、人間科学研究科

過去5年間、カリキュラムの構築から、国内外の研修の企画や維持、改善、そして履修生の引率まで、私にとって「共生」というものは、日常から切り離された学問的な概念でもなく、仕事上の暗黙の理念でもなかった。「共生」について考え続けることは、大阪と野田村とトロントを行き来しながら、多様な人々と一緒に活動し、お互いから学び合い、共に生きる環境を共に創ることであった。それぞれの現場での教育活動と現地の人々との交流の中で、震災後の海沿いの防潮堤の高さからトロントの移民たちの居場所づくりの取り組みまで、比較は人と人、人と制度、そして人とものとを結びつける遭遇に他ならないということに、私はだんだんと気付いてきた。

本誌第3号の特集の「あとがき」で森田敦郎が次のように指摘する。

「遭遇としての比較」は、一筋縄では捉えがたい共生の実践（略）を学び経験するための入り口となる。と同時に、それは、このプロセスを分析的に理解するための研究にとっての出発点ともなる（森田 2016: 211）。

野田村でのコミュニティ・ラーニングは、履修生たちが現地の人びとの中から自分の関心にそって訪問し、フィールドワークを開始するという仕組みである。誰と遭遇し、どこから現場に入って、共生の実践に取り組むのかは、彼らの独自の共生学への入り口となる。例えば彼らの研究関心は、現場にたどり着く動機でもある。ある履修生が2015年の東北フィールドワークの報告書でこう述べる。「私は応用言語学を専門とし、言葉を通して人のつながりが生まれる活動に興味を持っているため、読み聞かせ活動を行っている「あっぷっぷ」の皆さんにインタビューを行った」（伊藤他 2016: 378）。すなわち未来共生を学ぼうとする履修生はそれぞれ違う学問的背景を持つのが本プログラムの特徴であり、共生を考える刺激的な土台でもある。

一方、共生学を築くという目的を掲げるとき、それはさまざまな理念と実践、人間と非人間との遭遇から始まることも忘れてはいけない。これは単なる倫理的な問題ではなく、このような遭遇を可能にする比較が共生学の重要な手法になっているからである。そして、この手法によって、また新しい遭遇があり、現場のさまざまな課題を共生学として問い続けるのだろう。トロント大学でRESPECTの履修生たちを5年間指導してきたボニー・マッケルヒニーが書いているように「私たちは、「多文化主義」や「共生」の概念に記号化されている多様性の理解に対して比較論的な視点を開発したいと考えている」（マッケルヒニー 2016: 39）。**言い換えれば、比較は共生の手法でありながら、共生学の目的でもある。**

参照文献

伊藤莉央・岩根あずさ・小泉朝未・林貴哉・陳文叡・山田真知子
2016 「震災から4年を経た野田村の今――6人の眼を通して見えてきたもの」『未来共生学』3: 376-383。

木村周平
2016 「津波とともに生きる人びと――東日本大震災被災地でのフィールドワークから」伊藤純郎・山澤学編『破壊と再生の歴史・人類学』筑波大学出版会、pp.93-109。

マッケルヒニー、ボニー
2016 「ネオリベラル多文化主義とカナダの謝罪の時代」『未来共生学』3: 33-62。

森田敦郎
2016 「あとがき」（特集：共生と多文化主義の比較研究に向けて）『未来共生学』3: 202-212。